日本医史学雑誌　第65巻第3号（2019）　348–351

# コペンハーゲンの医学博物館を訪れて

安西なつめ

日本大学

ヨーロッパの医学系博物館についてはたびたび報告されるものの，北欧の医学系博物館の報告は少ない．筆者は2018年8月に，研究の一環としてデンマークの首都コペンハーゲンを訪れ，当地の医学博物館（Medical Museion）を見学した[1]．本稿では本博物館のガイドツアーで得られた情報や，パンフレット，カタログ，また周辺資料を用いて医学博物館の概要を紹介したい．

## 博物館の基本情報

医学博物館があるコペンハーゲンは，シェラン島北東部とアマー島にまたがる北欧最大の商工業都市である．デンマーク語では商人の港（København）という意味であり，古くから商港，漁港として栄えた．特に17世紀初頭，国王クリスチャン4世（Christian Ⅳ，在位1588–1648）の時代に都市が拡張し，以来，発展を続けてきた．市内では現在でも，ローゼンボー宮殿（1634年完成）やラウンドタワー（旧天文観測所，1642年完成）など，17世紀の建築物を多数見ることができる．

博物館へは，多くの旅行者にとって旅の起点となるコペンハーゲン中央駅を出発し，1662年にコペンハーゲン港防御のため建設されたカステレット要塞を目指して歩くと，30分ほどで到着する．

博物館はブレズゲーゼ（Bredgade）という大通りに面した重厚な石造りの建物で，地下1階，地上階，1階（日本における2階部分）からなる（写真1）．地下部分と，1階中央の講堂をのぞくと，館内は小さく区切られた15ほどのスペースでできており，各スペースで展示が行われている．

2018年現在，通常，火曜日から金曜日までは10時から16時，土日祝日は12時から16時の開館で，月曜日は休館日である．

**写真1**　医学博物館の正面外観

## 組　織

本博物館は，コペンハーゲン大学の健康医科学部，公衆衛生学科に属する施設である．コペンハーゲン大学はデンマークの国立大学で，1479年に国王クリスチャン1世（Christian I，在位1448–1481）によって創立された．北欧の大学としては，スウェーデンのウプサラ大学（1477年創立）に次いで歴史が古く，1928年にオーフス大学が設立されるまで，デンマークで唯一の総合大学であった．コペンハーゲン大学は現在でも国の学術・研究・教育の中心であり，たとえば，デンマーク自然史博物館（動物学博物館，地質学博物館，植物園などから構成される）や王立図書館など，市内にある学術・研究・教育関連施設の多くがコペンハーゲン大学の機関となっている．医学博物館はその一つである．

## 歴史と経緯

本博物館はデンマーク医学史の中でも特に解剖学，外科学の歴史と関わりが深い．ここで博物館設立の背景を簡単に辿る．

デンマークでは1644年に，当時コペンハーゲン大学の教授であったシモン・パウリ（Simon Pauli, 1603–1680）の指揮によって，解剖のための施設「解剖の家（Domus Anatomica）」が設置された[2]．「解剖の家」はコペンハーゲン大学の敷地内にあった図書館を利用してつくられたもので，すぐ隣は聖母教会の墓地であった．当時「解剖の家」は，シモン・パウリやトマス・バルトリン（Thomas Bartholin, 1616–1680），ニコラウス・ステノ（Nicolaus Steno, 1638–1686）らによって使用されたが，残念ながら1728年の大火によって損壊してしまった．現在，跡地とその周辺は，コペンハーゲン大学の社会科学系のキャンパスおよび，キャンパスと聖母教会を隔てる公共の広場（Frue Plads）になっている．

大火の後，1736年には「解剖の家」からわずか数百メートル離れたクマーゲーゼ（Købmagergade）に新しい解剖劇場が設けられた．これが「外科・解剖劇場（Theatrum Anatomico-chirurgicum）」である．この劇場は1785年頃まで使用されていた．

1785年には王立外科アカデミー（Det Kongelige Kirurgiske Akademi）が創設され，1787年にはアカデミーの拠点がブレズゲーゼに建てられた．この建物が現在の医学博物館となる．それまで「外科・解剖劇場」で行われていた外科学の教育，研究のための解剖はアカデミーに引き継がれることになった．

その後アカデミーは1842年にコペンハーゲン大学に統合され，アカデミーの建物はデンマーク医師会50周年となる1907年に，公立の博物館として開館された．1918年以降はコペンハーゲン大学が運営する博物館となり，現在に至る．開館当初は医学歴史博物館と命名されたが，その後名称が変更され，現在の形となった．博物館の正面外壁の最上部には，今もラテン語で王立外科アカデミーと刻まれている．

## ガイドツアーの実施

観覧は基本的にガイドツアーへの参加によって可能であり，ツアー後は自由に観覧することができる．2018年現在，平日は1日に2回（デンマーク語の回と英語の回が1回ずつ），土日は1日に3回（デンマーク語の回が2回，英語の回が1回）のツアーが予定されている．ツアーでは45分程度で館内を大まかにまわり，展示の概要について説明を聞くことができる．参加当日のガイドはコペンハーゲン大学で生物学を専攻しながら医学の歴史を学ぶ学生であった．

## 展示内容

博物館自体は決して大規模なものではないが，所蔵は充実している．本博物館はデンマークにおける医療，ヘルスケア，薬学，医療機器，医学史関連の資料など，17世紀初頭から現在に至る250,000点ほどのコレクションを有しており，その一部を常設展示している．

館内は古い建物のためか非常に入り組んでいるが，決まった順路は設けられておらず，区切られたスペースごとに異なるテーマが設けられていた．たとえば訪問当日は，「バランスと代謝」，「王立外科アカデミー」などの展示があった．

歴史関係の所蔵品はテーマに沿って展示されているものの，基本的にデンマークの医学の歩みを概観するような構成は意図されていない．また，外科学や病理学など，分野ごとの展示というわけでもなかった．以下では特に歴史に関連し，興味深かった内容を紹介する．

博物館の核となっているのは最も広い部屋で行われている「収集された人体 Det Indsamlede Menneske」と題された展示である[3]．この展示は医学がどのように人体を探究し，保存し，収集してきたかを，全身，器官，組織，細胞，分子の順に紹介するものである．観覧者は，人体の探究が過去から現在に近づくほど，集められた人体のパーツが小さくなっていくのを視覚的に理解することができる．

この展示の中でも特に観覧者の目を引くのが，

壁一面のキャビネットに収納された「サクソフォン・コレクション」の一部だろう．このコレクションには単眼症や結合双生児，シレノメリア（人魚体奇形）など，様々な奇形を呈する胎児あるいは乳児のホルマリン標本が含まれている．この医学的に貴重な標本の数々は，18世紀後半，医学生や助産師の教育と指導を目的として，デンマーク産科看護協会のマティアス・サクストーフ（Mattihias Saxtorph, 1740–1800）教授によって集められたものである．当日の展示には含まれていなかったが，コレクションにはこうした標本のほかに，中絶のための器具や，1500年代の書物なども含まれているという．この「サクソフォン・コレクション」を含む「収集された人体」の展示には，その他にも19世紀以降にコペンハーゲン大学で収集された正常および病理的な骨または臓器の標本が多数含まれている．当日参加した十数名のツアー参加者のほとんどがこうした標本を興味深げに眺めていた．

館内でも広い中央のスペースは，王立外科アカデミー時代の講堂である（写真2）．講堂では当時，解剖のトレーニングやレクチャーが実施されていた．講堂はルーツである解剖劇場を思わせるすり鉢状の半円構造で，天井が高い．前面の上部には向かって左にヒポクラテス（Hippocrates of Cos, ca. 460–370 BC），右にガレノス（Galenos, 129–216）のレリーフが飾られていた．背面の壁にはプレートがあり，デンマーク＝ノルウェー王クリスチャン7世（Christian Ⅶ，在位1766–1808）の名とともに，このアカデミーが市民の健康のため築かれたことが記されていた．通常，背面の壁にある丸い壁龕（へきがん）には，王立外科アカデミーの初代教授たちの胸像が置かれているとのことだったが，残念ながら訪問時には見られなかった．

ツアーに参加した観覧者はすり鉢状に設けられた席の好きな場所に座り，しばしこの講堂に関する説明を聞いた．講堂は現在も関連する多様なイベント，講演，セミナーの会場として活用されている．昨年には，デンマーク医学史学会（DMHS: Dansk Medicinsk-historisk Selskab）[4] が，学会創立100周年の記念シンポジウムにおいて，オープニング講演をこの場所で行った．

そのほかにも館内の随所で歴史関係の展示品が見られた．たとえば18世紀以降19世紀まで使用されていた外科器具や，かつて博物館の隣にあった王立フレデリク病院（1757–1910）内に設けられていた薬局の再現コーナー（写真3）などである[5]．

しかし本博物館はもともと，蓄積された収蔵物を用いて医学の歴史や自国の医学の特徴を体系的に展示，説明するという性質の博物館ではない．実際，館内には出来事を時系列で説明するための年表や人物のパネルなどがほとんど見当たらなかった．その一方で，細菌や代謝，遺伝などを取り上げた展示からは，医学の現在を伝えるという博物館の意図が感じとれた．展示方法も工夫さ

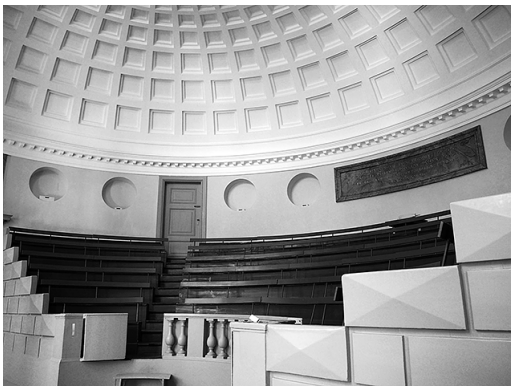

**写真2**　講堂

**写真3**　王立フレデリク病院内に設置されていた薬局の様子．中央に置かれたドーム型ガラスケースはアート作品である．

れており，部屋によってはアートワークやインスタレーションの要素が盛り込まれ，医学的なトピックがアートへと広げられていたのが印象的であった．

## 博物館を訪れて

現在，医学博物館となっているのは，18世紀にデンマークの外科学を支えたかつての王立外科アカデミーの建物である．今この場所は，医学の過去，現在，未来を発信する博物館として，またセミナーや学会，ワークショップの場として，多くの人々に利用されている．この場所が昔も今も，デンマーク医学史にとって重要な場所であることは間違いない．医学博物館の訪問はデンマーク医学史の一端に触れる有意義な時間となった[6]．

## 謝　辞

本稿は2018年度科学研究費補助金「初期近代における北ヨーロッパの医学の発展に関する研究」（課題番号17K12958，研究代表者 安西なつめ）による成果の一部である．

## 参考文献と注

1）医学博物館公式サイト http://www.museion.ku.dk/ 2018年10月24日閲覧
コペンハーゲン大学健康医科学部公衆衛生学科サイト内博物館情報 https://publichealth.ku.dk/about-the-department/museion/　2018年10月24日閲覧
2）解剖の家（Domus anatomica）に関しては次の資料が詳しい．Thomas Bartholin. The Anatomy House in Copenhagen. Copenhagen: Museum Tusculanum press; 2015
3）THE BODY COLLECTED. 電子版カタログ http://www.museion.ku.dk/bodycollected/catalogue/　2018年10月24日閲覧
4）デンマーク医学史学会のサイト http://www.dmhs1917.dk/　2018年10月24日閲覧
5）現在はデンマークデザイン博物館になっている．
6）未訪問ではあるが，デンマークにはほかに，科学と医学の歴史に関する博物館としてSteno Museumがある．この博物館はデンマーク第2の都市オーフスにあるオーフス大学が有する科学博物館の一つである．ただし医学以外に天文学など科学全般の歴史を扱っており，今回訪れた医学博物館とは性質が異なるようである．